

# 巻頭言

院長 遠藤 一 靖

仙台市立病院医学雑誌第27巻が刊行されることになりました。原著、症例報告、コメディカルレポートなど、院内各部門よりの13編の論文と救命救急センター症例検討会報告4編で構成されています。執筆者、編集委員の方々、そして3編の論文を寄せられた長沼先生に感謝します。

ここで当院の「医学雑誌」の歴史を振り返ると、昭和12年に学術活動の1つとして発足した院内集談会にその流れを発し、昭和32年に“諤親会”メンバーが中心となって創刊されました。その後、第6号で一旦休刊となっていました。昭和55年に再刊され、以来歴代の編集委員の多大なる努力により途切れることなく現在に至るまで毎年刊行されてきました。その再刊第1号の巻頭言で、当時の院長丹野三男先生が「医学雑誌」刊行の意義を『院内の学術、診療活動を盛んにして将来の発展を期待できる』と述べています。再刊より四半世紀が過ぎた今、「医学雑誌」を発刊する目的、内容について、より良いものにするよう歴史を踏まえ前向きに改善していくことが肝要です。「医学雑誌」にはその折々の病院独自の機能、活動を公表する役割を持ち合わせています。当院の現状を考え合わせた役割としては、まず、各診療科・各部門の新しい取り組みを積極的に報告することになります。併せて、臨床研修医の研修の成果を発表する場にもなるでしょう。臨床研修必修化で研修医の研修スタイルが大きく変化しています。スーパーローテートになり多くの診療科を小刻みに研修することになり、以前のように1つの診療科で症例をじっくり議論、整理することが困難になっています。しかし、臨床研修の2~3年間の間に論文作成を行なうことで科学的な見方、考え方、まとめ方を学ぶ非常に効果的な研修になりますので、研修医が積極的に投稿できるよう研修医の指導方法、指導体制も含めたサポート対応が必要でしょう。さらに、診療結果の臨床指数(クリニカル・インディケータ)など当院の医療の質について対外的に発表する場として活用していくことも可能でしょう。これからは医療の質を評価する基準として、悪性疾患に限らず、疾患の生存率、合併症発生率、再手術率、死亡率など、病院として常に把握しておくべき臨床指数による数量化などを実行することが求められます。各診療科の“1年間の診療実績”などを報告できれば、病診連携、病病連携を推進する上でも有用な資料になります。

院内全体の学術活動促進に関しても十分な対策が必要です。病院を取り巻く医療環境は年々厳しくなっており、仕事量も仕事の質も以前と比べても明らかに増大しており医療者の日常業務での重い負担になっているのも事実ですが、学術活動・業績はその病院の医療の質を反映する1つの指標でもあり、同時に病院の活動性を示す情報発信手段にもなります。学術活動を促進する環境作りはどうしたらよいかも含め院内でぜひ取り組んでいきたいものです。

以上、病院の医療レベルの向上には、一人ひとりの自主的な研鑽が基本となります。論文発表、学会活動などは大変有効な手段になりますので、この点でも本誌を今以上に効果的に活用していただきたいと考えています。